日本訳詩家協会60周年記念コンサートReport
～at「銀座ブロッサムホール」2023.09.17～

レポート:摩耶麗子　写真 :@K.O.G.PHOTO

RIOさんのマネージャーとして、また永田文夫さんとの親交も深かかった日本訳詩家協会理事の摩耶麗子さんからReportを寄せていただきました。

ボニー・ジャックス

「海をこえて　心をつなぐ」コンサートは「サンライズサンセット」（加藤登紀子会長と会員16名のコーラス）で華やかに幕をあけました。トップはボニー・ジャックスの「月光値千金」（1928年発表のアメリカのポピュラーソング）この邦題は伊庭孝が、蘇東坡(中国北宋時代)の「春夜詩」の一節「春宵一刻値千金」から名付けたものとか。ボニー・ジャックスは榎本健一バージョンで歌いました。「60周年記念コンサート」らしいワクワク感に満ちた2曲から、「ルイジアナ　ママ」で会場は一挙に昭和の青春に。続いて、音楽評論家であり作詞家のレジェンド湯川れい子氏と加藤会長のトークコーナー。「翻訳ポップスの魅力について」皆、感動と納得。その後は正会員によるポピュラーソングが、会長と大野修平会長代行のトークを挟んで11曲。1部ラストに池端慎之介（ピーター）を迎えて「越路吹雪メドレー（サントワマミーから愛の讃歌まで全6曲）」越路吹雪を偲び、岩谷時子の訳詩に思いを馳せ、池端慎之介（ピーター）の魅力に酔いしれつつ、休憩に入りました。

2部はクミコの「時は過ぎてゆく」「幽霊」から始まり、協会役員5名が役員の訳詩曲を歌い「オリジナル訳詞」の魅力へと誘いました。後半はTVでもお馴染みの渡辺えりが加藤会長との飾らないトークで会場を沸かせた後、渡辺えり自身の訳詩「エルクンバンチェロ」「ロコへのバラード」を深紅の頭飾りと衣装、圧巻パフォーマンスで会場中の心を鷲掴みに。トリは来年歌手活動60周年を迎える加藤登紀子が、「さくらんぼの実る頃」「花はどこへ行った」「百万本のバラ」と、誰もが知っている加藤登紀子自身の訳詩で、しみじみと情熱的に歌い上げ、会場中が深い感動に包まれました。最後は出演者総出で「唯ひとたびの」（訳詞：加藤登紀子）を歌い、会長の「今回で終わりません！　また来年もこの会場で！」と思いは明日へ。

加藤登紀子&渡辺えり

加藤登紀子

クミコ

池畑慎之介（ピーター）

日本中で大小を問わず「訳詞を歌うコンサート」が開催され、これは世界で類をみない日本文化かと。そんな中、今回のコンサートは、「訳詞曲」の歴史を振り返り、未来へつなぐ意義深い公演になったのではないでしょうか。それにしても、地味な「協会の活動」をこんなに幅広い沢山のお客様に楽しんで頂ける「コンサート」としてプロデュースした加藤登紀子会長の太陽のような愛と情熱、それを支え緻密に形にした深江ゆか理事（コンサート実行委員長）。お二人のリーダーシップのもと、心ひとつに「60周年記念イベント」に携われたことは、関係者一同大きな幸せでした。

今回を機に「日本訳詩家協会」の活動にご賛同、ご参加お待ち致します！

「日本訳詩家協会」の活動詳細は協会HP（https://www.jasts.net）をご覧ください。

日本訳詩家協会理事：摩耶麗子

出演者一覧

加藤登紀子、クミコ、渡辺えり、池畑慎之介（ピーター）、ボニー・ジャックス、湯川れい子〈TALK〉

藍澤雪頼、いさらい香奈子、貝山幸子、風かおる、Kaya、川出祥代、小宮ワタル、
佐竹律香、高木満寿美、松岡けい子、吉永修子
奥野秀樹、タマーラ、高野ピエール、深江ゆか 、水織ゆみ、大野修平〈TALK〉

演奏：藤原和矢グループ　藤原和矢（pf）長尾雅道(Bs)野口迪生(Dr)横内信也(Acc)
構成: 深江ゆか 演出: 嶋本秀朗 音楽監督:藤原和矢 コーラスアレンジ:奥野秀樹
制作:ラマンダ プロデューサー:深江ゆか 総合プロデューサー:加藤登紀子